希望の道標

vol.8

取材・文／広重隆樹
撮影／新田君彦

子どもたちとの感情の迸るような交流、そのなかで善と悪、生と死をどう伝えてゆくか

山折哲雄 *Tetsuo Yamaori* 宗教学者

やまおり・てつお●1931年、浄土真宗の僧侶の家に生まれる。東北大学大学院文学研究科卒。専攻は宗教史・日本思想史。国際日本文化研究センター名誉教授（元所長）、国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、平城遷都1300年記念事業評議員。大佛次郎賞、和辻哲郎文化賞、山本七平賞の選考委員も務める。青少年向けの著作に『わたしが死について語るなら』（ポプラ社）、『17歳からの死生観　高校生との問答集』（毎日新聞社）などがある。

師弟関係ということで、私がいつも思い出すのは、僧・良寛のことです。良寛は「子どもの純真な心こそが誠の仏の心」と解釈し、子どもたちと遊ぶことを好み、かくれんぼや手毬をついたりしてよく遊んだといいます。良寛と一緒に戯れる子どもたちにとっては、それは至福の時間だったに違いありません。いつまでもそのそばを離れようとしない子どもたち。親からすれば、良寛はあたかも「人さらい」のように映ったことでしょう。

そう、教師とはある意味では、親の時間から子どもを引き離し、子どもに黄金の時間を与える「人さらい」なのです。人さらいと子どもたちの、感情の迸るような交流。そこに私は、教育の原点を見いだします。

教育の場では子どもたちと共感する感情のつながりが大切ということです。そのつながりを感じることができる教職という仕事は素晴らしく、先生方はもっと誇りをもってよいと思いますが、もちろん、実際の現場が大変であることは私にも容易に想像がつきます。

なかには教室でハメを外し、外では反社会的な行動に走る子どももいるでしょう。子どもたちを善なる方向へどうやって導くのか。先生方は必死だけれども、時には悪を避けて通れない。善悪が併存する世界のなかで子どもたちがどう生き抜くのか。その方法を伝えることにこそ、教育の本質的な営みがあると思います。

教育の材料は何も学校だけにあるのではない。社会的な事件やニュース報道も貴重な教材です。例えば最近の相撲界。野球賭博などの不祥事に見舞われています。解雇されたなかに大嶽親方という人がいる。現役時代は貴闘力、私の好きないい相撲取りでした。相撲協会は彼をクビにしましたが、そのことに私は異議があります。たんに臭いものに蓋をするだけではないのか。むしろ彼を辞めさせないことで、彼の更生の過程を見続けることもできたのではないか。一度悪の世界に墜ちた人間が、善の道へ戻ろうとするその努力を見守ることこそが、青少年にとっても最良の教材になると私は思うのです。

善と悪は切り離すことができない、人間世界の二つの側面です。そのことを教えず、善なるものだけを教えるのでは、子どもたちから耐性というものが失われてしまう。それを私は憂います。生と死についても同様です。

■

宮崎の口蹄疫のニュースを見ながら、私はあらためて人間の生と死について考えを巡らせていました。農家の人が「ふだんは当たり前のように牛を"出荷"しているが、全頭殺処分となると我が子を殺すような気持ちです」と話すのを聞きました。しかし、考えてみれば、出荷という行為もまた、牛を殺すことではないのか。農家の人さえ、そのことを余り意識していない。日常的に見えなくなっている家畜の死というものが、疫病の流行の時にあらためて姿を現すのです。

動物をシステマティックに殺し、それを食料とすることなしには、私たち人間は生きることができません。「万物の命を大切にしよう」と言いつつも、なぜ、人間は動物を殺して生きることを許されているのか。誰がそれを許しているのか。そうした疑問は、宗教についての根源的な問いを孕んでいます。

例えば口蹄疫の話題を切り口に、人間の生と死を考えつめていけば、結局は宗教に行き着く。宗教とは、人間を超えたものの力を感じる能力のことです。それを豊かにすることが、若者の心を育むことになるのです。

■

善と悪、生と死のことをもっと教室で教えてほしい。そこでは生半可な知識よりは、教師自身が裸になって自分の存在をさらけだすことが必要かもしれません。これは私自身が肝に銘じていることですが、こうした重要なテーマについて語るときは、自分が体験したことしか語ってはいけないし、自慢話や他人の悪口は慎まなければなりません。ものごとを批評することは構わないけれども、その時は、自分の背中を貫いた刃の切っ先で相手を刺すぐらいの覚悟で臨まなければなりません。

そのように真摯な態度は、必ずや子どもたちに通じることでしょう。しかし、言葉には限界があります。何万という語彙を費やして説得をしても、通じない時がある。限界を超えて言葉を継ごうとすると、時にその言葉は暴力になります。その手前で止まって、潔く沈黙すべき時もあります。美しく沈黙し、背中を見せて教室を去ることもまた、大切な教師の仕事ではないかと思っています。